大学院の学生の頃から学科のコンピュータの管理・運用にかかわってきましたが，1981年6月に九州大学情報処理教育センターに勤務するようになって以来，これまで35年近く，センターなどの管理・運用などの業務に仕事としてかかわってきました．こうした経験を通じて感じることは，現場で利用者のために頑張るほど，研究者としての業績(論文)に結びつきにくいということです．少なくとも研究テーマと業務が別々になっていると辛いものがあるように思います．

情報処理センターなどにおいて，日々の運用を円滑にするために，あるいは新しいサービスを提供するために，さまざまな創意工夫をするのですが，これらに対して「それって単なる業務プログラムでしょう」と言われることが多々あります．業務プログラムの開発は研究ではないという意味合いを含んでいるわけです．もちろん定型処理をするためのプログラムも多くありますが，実際には業務効率を格段に改善するため，あるいはまったく新しいサービスを行うためなどに，新規性のある創意工夫が必要なことも多いのです．

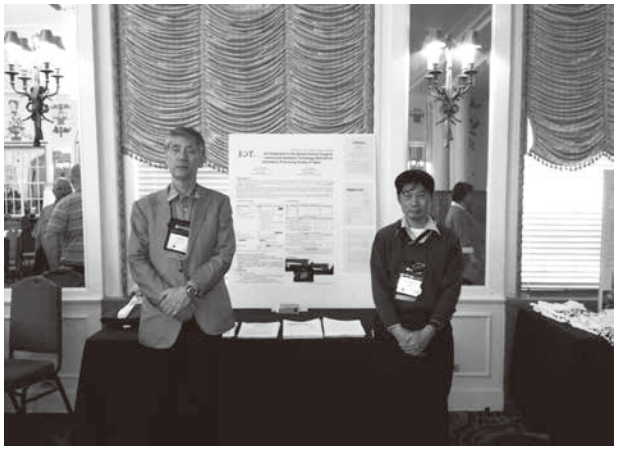
海外ではこうした現場の創意工夫などを大事にしてくれるように感じます．米国のACM (Association for Computing Machinery) にSIGUCCS (Special Interest Group for University and College Computing Service)☆1という研究会があります．この年次大会には多くのセンター関係者が集まって，現場の創意工夫を大事にした議論が展開され，参加していて嬉しくなる学会です．2006年以来，この年次大会に毎年かかさず参加し，テクニカルセッションやポスターセッションで発表しています．日本からも数はそれほど多くはありませんが，いつも参加者があり，常連になっている人もいます．写真はSIGUCCS 2012のポスターセッションでIOT (Internet and Operation Technology) 研究会の紹介をしている様子です．

藤村直美 Naomi FUJIMURA

九州大学

［正会員］ fujimura.naomi.274@m.kyushu-u.ac.jp

九州大学大学院芸術工学研究院教授，副理事，情報統括本部長，本会フェロー，ACM他会員，九州大学情報処理教育センター次長，九州芸術工科大学情報処理センター長を経て2010年から情報統括本部長．



SIGUCCS 2012のポスターセッションにて

応般

［シニアコラム］

IT好き放題

［No.55］

情報処理センターにおける創意工夫と論文化

日本の大学などの研究者の多くは，そもそも「情報システムを運用してサービスを提供する」ということの重要性や難しさを理解する機会が少ないのでしょうか．DSM (Distributed System Management) 研究会の主査をしているときには，情報処理センターなどにおける創意工夫を研究論文としてまとめられるように色々な努力をしました．他の学会などでも，論文誌の編集委員会の委員長などを引き受けたときに，できるだけこうした方針を大切にしてもらうように働きかけました．センターなどで活躍している研究者の頑張りが業績に結びついて報われるようにするためです．

40年以上も前のことですが，卒業研究をしているときに，指導教官が「それは何の役に立つのですか」といつも言われていたのが今でも印象に残っています．学問分野には色々ありますが，少なくとも工学では「世の中の役に立ってなんぼ」ということはあると思います．現在の本会の論文査読基準では「新規性」と「有用性」の両方が評価されるようになっていることは喜ばしいことだと思います☆2．

(2015年5月5日受付)

☆1 SIGUCCS: http://www.siguccs.org/

☆2 情報処理学会査読基準：https://www.ipsj.or.jp/journal/info/jour_topics/topi4.html